



Title	巻頭言：科学的エビデンスと哲学的思索
Author(s)	佐藤, 真一
Citation	生老病死の行動科学. 2020, 24, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/76693">https://hdl.handle.net/11094/76693</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 卷頭言

### 科学的エビデンスと哲学的思索

#### Scientific Evidence and Philosophical Thinking

佐藤 真一

少子高齢化による超高齢社会の進展を表す数値が毎年更新され、報道されています。

昨年度の出生数は86万4千人と1899年の統計開始以降初めて90万人を下回りました。それに対して死亡数は、137万6千人となり、人口の自然減が51万人と初めて50万人を上回りました。5月に元号が変わったことにより、この月の婚姻数が前年度の約2倍となり、期待されていた「令和婚現象」自体は見られたようですが、年間を通しての婚姻数はやはり減少してしまいました（厚生労働省、2019）。

国連人口部（2019）は、2年前の発表時点よりも日本の人口減が早まっているため、日本の2100年的人口は7500万人になると予想しました。ところが、日本の人口減はそれ以上に加速的に進むとの予想もあります。国立社会保障・人口問題研究所（2017）の発表では、今後の死亡数が一定で出生数が減少するという条件の下で推計すると、日本の人口は2017年の1億2,677万人から2100年には4,485万人にまで減少してしまうとのことです。人口の推計は、設定する条件によって異なるので、国連の予想と社人研のこの予想（他の条件の推計もある）のどちらが現実になるかはわかりませんが、国連の2年前の予想よりも人口減は早いとの結果を見ると、2100年に日本の人口が5千万人を下回ってしまうということもあり得ないことではないかもしれません。

高齢化に関する数字としては、65歳以上の高齢者率（高齢者割合）が昨年28.4%に増加したと報道されました（総務省、2019）。高齢化率7%以上を高齢化社会、14%以上を高齢社会、21%以上を超高齢社会と呼ぶのであれば、さらに7%増加した28%の社会は何と表現されるのでしょうか？ 高齢化率が日本に次いで第2位のイタリアでもまだ23%だそうですから、それよりも5%以上も多い我が国の高齢化は、世界でも群を抜いているといえるでしょう。ある人口学者は、高齢化率世界一の日本の平均寿命が増加しているうちは、人類の寿命の限界年齢はわからないと述べています。現代日本人の平均寿命は、女性約87歳、男性81歳ですが、死亡年齢の最頻値は女性93歳、男性87歳です（厚生労働省、2018）。人生100年時代はもうそこまで来ているのです。

人類の高齢化がどこまで進むかはとても興味深いところではありますが、一方で、人口がこれほどに急激に減少する日本社会の変化を想像すると恐ろしく感じるのは私だけでしょうか？

2020年の今年は、東京オリンピックが開催される記念すべき年です。数字といえば、オリンピックに関連する様々な数字も発表されています。その中でも世間の注目を浴びているのが、オリンピック開催経費です。2016年には最大でも1兆8千億円との予算が立てられましたが、2017年には1兆3850億円に縮減できると「世界一コンパクトなオリンピック」が表明されました。金額に疎い私は、この額でも「コンパクト」なのかと驚いていたことを覚えています。ところが、2019年末現在では3兆円を超えると発表されました。なぜ、短期間で

このように金額が変わってしまうのかを思うと、オリンピック開催に関わる人々の表には出てこない思惑が絡んでいるのではないかと疑ってしまいます。数字で表れる予想は、殊お金のこととなると、税金を納めている身としては他人事ではなくなります。何となく裏切られたような気持ちになった人も多いのではないでしょうか。

少子高齢化に関する数字がオリンピック開催経費に飛んでしまいましたが、老年学に話を戻しましょう。

現代社会を賑わしているのは、冒頭の少子高齢化の人口学的数値ばかりではありません。「健康維持・増進のために毎日運動をこれくらい」、「野菜やタンパク質の摂取はこれくらい」との数値データに基づく健康指導が、学会をはじめ、かかりつけ医や栄養士などの専門家によって行われていますし、テレビのバラエティ番組でも頻繁に取り上げられ、テレビショッピングの健康食品や健康器具の宣伝は凄まじいばかりです。

しかし、個々人の人生は、必ずしもデータ通りには進まないものです。人生は、単純な因果関係では説明できないことの連続でもあるからです。健康のために運動をしていたのに、食事に注意していたのに、認知症予防の脳トレをしていたのに、「なんでやねん！」これが人生です。数字に裏切られてしまうことも、また人生なのです。

大阪大学では、主に文系研究者が主導する文理融合の研究プロジェクト、社会ソリューションイニシアティブ（SSI）が進められています。私が代表を務めるプロジェクト「一人ひとりの死生観と健康自律を支える超高齢社会の創生」も基幹プロジェクトの一つに採択されました。このプロジェクトで行われている研究や活動は多岐にわたりますが、私が意図している大きな方向性があります。それが、科学的エビデンスと哲学的思索の融合です。

私たちが行う科学的エビデンスに基づく研究は、基本的に確率論に基づくデータを用います。すなわち、研究者は綿密に設計され、実行されて得られた科学的エビデンスの従者（follower）となることが必要です。例えば、大阪府保険者協議会から依頼された大阪府民300万人×6年分、1テラバイトのビッグデータを、人工知能を用いて解析しています。

一方で、人々の人生も確率的に規定されているとはいえ、それらは、一人ひとりの人生には1か0の結果をもたらします。がんに罹患するかどうかは確率的な問題でもありますが、罹った当人やその家族にしてみれば、確率論とは無関係な現実なのです。その時に必要なのは、がんに罹患した現実にどのように向き合うかです。私たちのプロジェクトでは、定期的に「哲学カフェ」を開催して、今後私たちが体験する可能性のあるライフイベントを予習すると共に、実際の体験から学んだことを互いに分かち合っています。私たち一人ひとりが、唯一無二の自分自身の人生に対する哲学的思索の主人（master）になるためです。

最終的には、こうした文理融合の成果を政策提言としてまとめることを目的にしています。

---

「生老病死の行動科学」第24巻をお届けします。インターネット上の公開もしていますので、そちらもご覧いただければ幸いです。

大阪大学学術情報庫（OUKA） <http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/>

また、当研究室のホームページからもご覧いただけます。

臨床死生学・老年行動学研究室 <http://rinro.hus.osaka-u.ac.jp/>